

■<私見>津速産霊（造化三神）

古事記では、造化三神は、天御中主・高皇産霊神・神産霊神である。

「津速産霊神」を三神に含むと、「天御中主」は必然的にそれより上位の神となる。西洋の「絶対神」に近い。神職のうち、忌部氏の祖神が「高皇産霊神」とすれば、中臣氏の祖神も同様の地位であってもよい。

なぜ、記・紀は、「津速産霊」を造化三神に含めなかったのか。日本書紀の一書にも全く出ない。

忌部を「阿波」、中臣を「豊後」とすると、高天原は、四国と九州の2か所になってしまう。これを避けたのか。

（※当時の実力者、藤原不比等でも、根源神を改竄することは、無理だったのか。）

しかし、持統天皇（藤原氏）は、「豊受大神」を封印するほどの実力を行使したが。）

<参照>津速産霊神 <http://www.0o0d.com/jinbutsu/index.php?>

津速産霊神（つはやむすび）

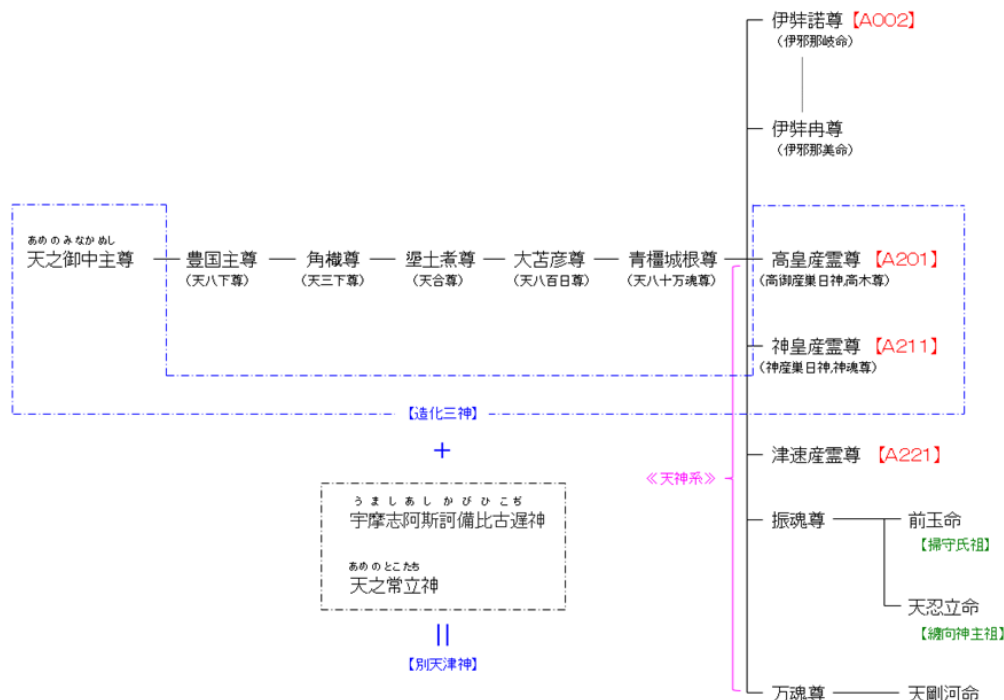
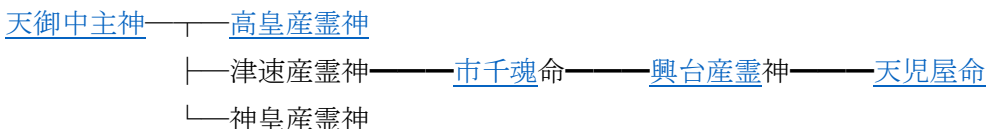
『記・紀』には登場しない。

忌部氏の文書である『古語拾遺』には、[天御中主神](#)を始源神とし、[高皇産霊神](#)を長男、津速産霊神を次男、神皇産霊神を三男として天中に存在したとされる。（注）『古語拾遺』（こごしゅうい）は、平安時代の神道資料で、官人であった齋部広成が大同2年（807年）に編纂した。全1巻。

奈良県大和高田市にある<高田天神社>の祭神は、高皇産霊神・神皇産霊神・津速産霊神を祀っていますが、由緒は違います。

社伝によれば、『第10代崇神天皇の御代の御鎮座で、御祭神は、古事記・日本書紀にみえる造化の三神である高皇産霊神・神皇産霊神の二柱と天児屋根尊の祖父神である津速産霊神の三柱・・・』とされている。

高皇産霊神（高天原）・津速産霊神・神皇産霊神（出雲）が長男・次男・三男と言うのは、伊邪那岐の三貴子の天照大神（太陽）・月読神（月）・須佐之男神（海原）や、大山津見神（山の神）の娘の木花開耶媛命・木花知流比売命・石長比売命木花開耶媛命の息子の火照命（海彦）・火須勢理命・火遠理命（山彦）で、2番目のお話が無い事からも、対立する2大勢力の仲立ちをさせるために名前を加える技法だとすると、津速産霊神の次男説は正しいかもしれない。更に、そこに目をつけた中臣氏（藤原氏）は流石と言うべきだろうか。



<参照>天児屋命 <参照 Wikipedia>

天児屋命 (あめのこやねのみこと) は、日本神話に登場する神。

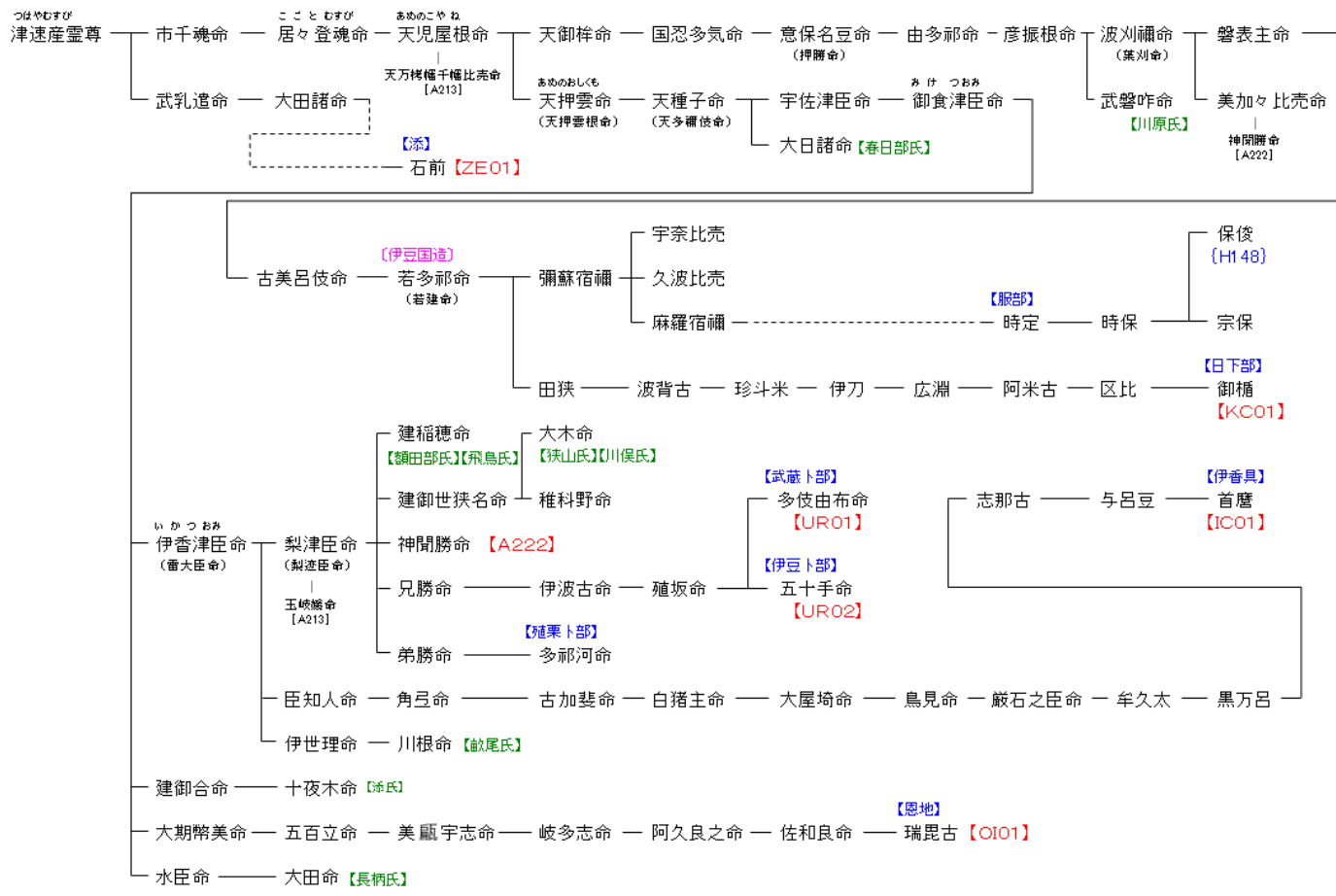
『古事記』では天児屋命、『日本書紀』は天児屋根命と表記される。別名として天足別命 (あめのたるわけのみこと)、武乳速命 (たけちはやのみこと)、速経和気命 (はやふわけのみこと)、天見通命 (あめのみとおしのみこと)、麻刀方命 (まとかたのみこと)、太詔戸命 (ふとのりとのみこと)、春日戸神 (かすかべのかみ)、国辞代命 (くにのことしろのみこと) などがある。

その他通称として春日権現 (かすがごんげん)、春日大明神とも呼ぶ。

『古事記』には岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに布刀玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際、邇邇芸命に随伴し、中臣連の祖となったとある。

父は、『日本書紀』および『新撰姓氏録』によると津速産霊神の御子神・興台産霊命 (居々登魂命：こごとむすび)、あるいは『古語拾遺』によると津速産霊神 (つはやむすび)、母は天石門別安国玉主命の御子神己等乃麻知媛命 (ことのまちひめ) で、天美津玉照比売命 (あめのみつたまてるひめのみこと) を娶って天押雲根命 (天忍雲命：中臣氏、伊勢国造祖)、天御杵命 (伊豆国造祖)などを儲ける。

櫛真智命の御子神・建御雷神の子、あるいは櫛真智命の子、または天辞代命の子とも伝える。また天児屋命の別名と見られる天足別命は、鹿島神 (建御雷神) の御子神とされる。



<私見>中臣氏

宇佐津臣は、神武を宇佐で迎えた宇佐津彦の妹の御子と思われる。倭人伝には、中臣氏の梨津臣、伊世理と思われる人が登場する。倭人伝では、特別な待遇を得ているから、後漢時代から魏にかけて、海部氏や中臣氏は、名の通った氏族として扱われたのだろう。

『古語拾遺』とは、古代の氏族である齋部（いんべ）氏の由緒を記した歴史書である。齋部広成（ひろなり）の撰述（せんじゅつ）で、807年（大同2）に成立した。祭祀（さいし）を担当した齋部氏が、同様の職掌に携わっていて勢いを強めた中臣（なかとみ）氏に対抗して、正史に漏れている同氏の伝承を書き記したものであり、正確にいうと、齋部氏によって提出された愁訴（しゅうそ）状であって、『古語拾遺』は後人による命名である。伊弉諾（いざなぎ）・伊弉冉（いざなみ）の二神の国生みと、神々の誕生神話から筆をおこし、757年（天平宝字1）の時代までのことが記述されており、齋部氏の氏族伝承をはじめ、記紀に並ぶ古代史の貴重な文献である。

古語拾遺一卷 加序

従五位下 齋部宿禰廣成撰

聞くところによると、上古の世は文字が無く、貴賤老少問わず口から口へ伝えていたが、その言った事、行った事や出来事を忘れはしないと書き記して以来、古を語る事を好まなくなり、浮ついた華やかさを競い興じて還って旧老をあざ笑い、遂に世代を重ねて古代を忘れ、代を重ねるごとに古法を失った。顧みて故実を問う時その根源を知らない。国史・家史にこの理由を記録されていると言っても、詳らかにすれば、なお判らない所がある。愚臣が言わなければ、恐らく絶えてしまっていて伝える事が出来なく成ります。幸いに召されて問われましたので、長らく思っていました事を述べたいと思います。故に旧事を敢えて申します。

聞くところによると、天地の初めイザナギ・イザナミの二神は共に夫婦と成り、大八州国（オオヤシマノクニ）および山川草木を生まれ、次に日の神と月の神を生まれ、その後に素戔嗚の神をうまれた。素戔嗚の神は常に泣き叫んでいた。そのため、人は夭折し青山は枯れ山と成ったので、父母の二神は

「お前の行いは大変ひどい。早く根の国に退去しなさい。」

と命じられた。

また、天地が別れる初めに天で生まれた神は、天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）と言う。

次に高皇産霊神（タカミムスビノカミ）[古くは、多賀美武須比と言う。これは皇親神留伎命である。]

次に神皇産霊神（カミムスビノカミ）[これは皇親神留彌命の事で、この神の子の天児屋命（アメノコヤノミコト）は中臣朝臣（ナカトミノアソシ）の先祖である。]

その高皇産霊神が生んだ娘の名は栲幡千千姫命（タクハタチチヒメノミコト）[天祖の天津彦尊の母である。]

生んだ男の名は天忍日命（アメノオシヒノミコト）[大伴宿禰の先祖である。]

生んだ男の名は天太玉命（アメノフトタマノミコト）[齋部宿禰の先祖である。]

太玉命の率いる神の名は天日鷲命（アメノヒワシノミコト）と言う。

[阿波（アワ）の国の忌部（インベ）の先祖である。]

手置帆負命（テオキホオイノミコト）[讃岐の国の忌部の先祖である。]

彦狭知命（ヒコサシリノミコト）[紀伊の国の忌部の先祖である。]

櫛明玉命（クシアカルタマノミコト）[出雲の国の忌部の玉作りの先祖である。]

・・・・・・<以下、略す。>・・・・・・

<私見> 古語拾遺

神明社の現代語解説では、「津速産霊神」は、出てこない。

中臣氏と忌部氏の対立が生んだ『産物』かもしれない。

ここでいう中臣氏は、藤原氏（百済王族）のこと。忌部氏は、齋部氏のこと。

その後、朝廷（藤原氏）は、忌部氏を祭祀の役割から外し、賀茂氏を朝廷の祭祀役としている。

■<私見>八咫鳥（賀茂建角身命）

下賀茂神社の神主は、30年毎に代替わりしているらしい。天皇年代復元の暦年と密接な関係にある。

賀茂の祖が、賀茂建角身命（俗に「八咫鳥」という）。神武東征時に、熊野から大和まで、磐余彦尊（狹野命）を先導（案内）しているから、紀元前BC80年～紀元元年頃の人だろう。

賀茂建角身命は、高皇産靈尊（高木神）の子孫である。

高皇産靈尊の子が天活玉命、天活玉命の孫が賀茂建角身命（陶津耳命）。

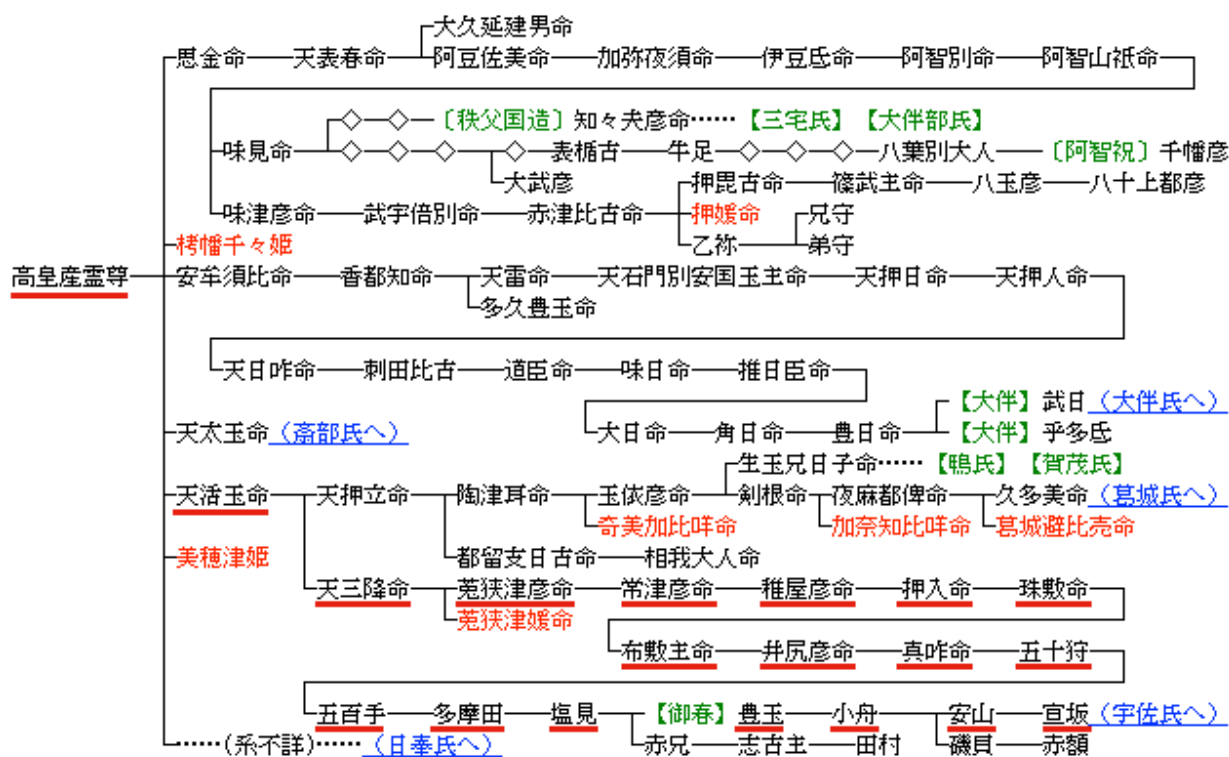
賀茂建角身命の出身地は、摂津の三嶋溝杵（湟咋）または陶津耳と呼ばれる場所らしい。

饒速日尊（大歳命）は、東征後、三嶋溝杵の娘（勢夜陀多良姫）および陶津耳の娘（活玉依姫）を娶った。

磐余彦尊（狹野命）は、東遷後、饒速日尊と勢夜陀多良姫の娘（多々良伊須気依姫：御歳姫）を娶った。

※書紀の神武東征（紀元後へ摺り替え）では、賀茂建角身命の孫の生玉兄彦命を「八咫鳥」に充てている。

また、書紀では、八咫鳥の神話を孝靈天皇（BC290～BC215）の時代に充てているようだ。



<系図参照：Wikipedia>

<参照：Wikipedia>八咫鳥

八咫鳥は、日本神話において、神武天皇を大和の橿原まで案内したとされており、導きの神として信仰されている。また、太陽の化身ともされる。

『古事記』では高木大神によって遣わされ、『日本書紀』では天照大神によって遣わされたと伝わる。『古事記』では兄宇迦斯・弟宇迦斯兄弟に神武天皇への帰順を求めるために遣わされるが、兄に鳴鏑で追い返されたとされる。一方『日本書紀』では兄磯城・弟磯城兄弟にそれぞれ帰順を求め、兄には「聞天壓神至而吾爲慨憤時、奈何鳥鳥若此惡鳴耶。」と言われ弓矢で追い返されてしまうが、弟はこれに恐れて「臣聞天壓神至、且夕畏懼。善乎鳥、汝鳴之若此者歟。」と言い、葉盤八枚に食べ物を盛って鳥に献上した。それで鳥は神武天皇のもとへ戻り、兄磯城に反抗の心がある旨を報告したと伝えているなど、両書の伝承に若干相違がある。その後『日本書紀』においてはその功が労われ、頭八咫鳥の子孫は葛野主殿縣主（かづののとのもりのあがためし）となり、劔根は葛城国造となっている。

なお、八咫鳥は『古事記』や『日本書紀』に登場するが、『日本書紀』では、同じ神武東征の場面で、金鵄（金色のトビ）が長髓彦との戦いで神武天皇を助けたともされており、天日鷲神の別名である天加奈止美命（あめのかなとみ）の名称が金鵄（かなとび）に通じることから、天日鷲神、鴨建角身命と同一視される。また賀茂氏の系図において鴨建角身命の別名を八咫鳥鴨武角身命としているが、実際は神武天皇と同世代の関係から考えて、記紀に登場する八咫鳥とは生玉兄日子命のこととされる。

<参照：Wikipedia>賀茂氏

賀茂氏（かもうじ、加茂氏/鴨氏/加毛氏）は、賀茂（加茂・鴨・加毛）を氏の名とする氏族。以下の3系がある。

<天神系>

地祇系賀茂氏とは別氏族である（『鴨氏始祖伝』）。

なお『山城国風土記』逸文では、賀茂県主の祖の賀茂建角身命（天神系）は神武天皇の先導をした後、大和の葛城（地祇系賀茂氏の本拠）を通して山城国へ至ったとしている。

神魂命裔

代々賀茂神社に奉斎し、山城国葛野郡・愛宕郡を支配した。また、賀茂県主は同じ山城国を本拠とする秦氏との関係が深い。平安時代初期ごろに上賀茂・下鴨の両神社の祠官家に分かれ、代々両社の祢宜を務めた。

上賀茂社祠官家に松下家・鳥居大路家・林家・森家・梅辻家・富野家・岡本家などが、下鴨社祠官家に泉亭家・梨木家・広庭家・滋岡家・鴨脚家などの諸家がある。

また、下鴨社祠官家として祝を世職とした鴨脚家は平安時代から賀茂県主姓を称したが、もとは祝部姓であったとされる。

高魂命裔 葛城国造と同祖であり、この系統の賀茂氏は神魂命裔の賀茂氏と同一である。

<地祇系>

大鴨積命（大賀茂津美命・大賀茂都美命）を始祖とし、三輪系氏族の一派に属する。

大鴨積命は大物主神（三輪明神）の子または後裔の大田田根子の孫で、『先代旧事本紀』によると速須佐之男命の11世の孫である。大和国（葛城）葛上郡の高鴨神社・鴨都波神社・葛木御歳神社付近（現・奈良県御所市）を本貫とする。

大鴨積命は鴨の地に祖神の事代主神を祀った鴨都波神社を建てたことから、「鴨君」（かものきみ）の姓を賜与された。なお、現在鴨の地にある高鴨神社・鴨都波神社の祭神である阿遲志貴高日子根命（迦毛之大御神）や積羽八重事代主命は、鴨氏の祖神であるとされている。

上古には「鴨君」・「甘茂君」と表記し、姓は君であったが、壬申の乱の功臣である鴨蝦夷（賀茂蝦夷）を出し、天武天皇13年（684年）に「賀茂朝臣」（かものあそん）姓を賜与された。その後、奈良時代から平安時代初期にかけては朝廷の官人として仕え、奈良時代には「高賀茂朝臣」の姓を賜与された者もいた。

<備前鴨（加茂）氏>

以下、略す。

<私見>賀茂族

賀茂族の系統は、ちょっと難解である。（中臣氏・忌部氏との関係は、不明。）

神武時代の八咫鳥の鴨族は、高産霊神の系統に当たるようだ。大物主（三輪氏）系には、崇神時代の大田田根子がいる。修験道の役小角／役行者（えんのおづぬ）も、賀茂族の出身。葛城山の「高鴨神社」が元であるといわれるが、京都・山城の「賀茂神社」とは別系統？のようだ。